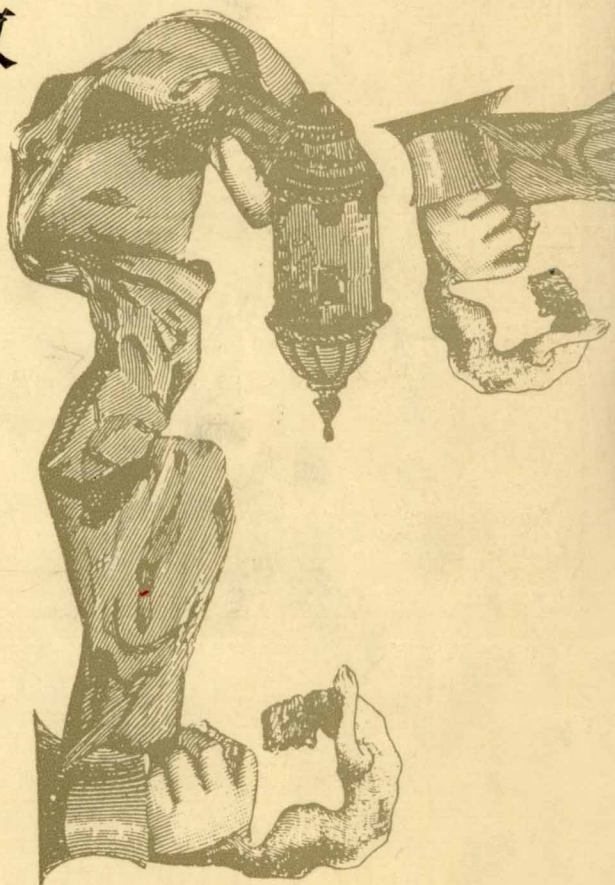


探検百首

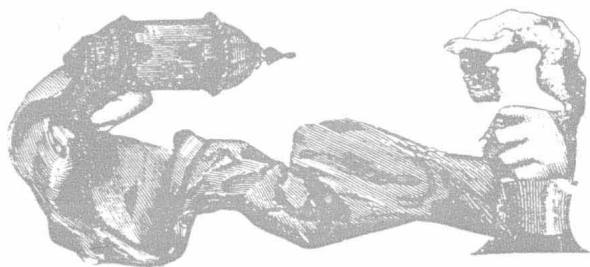
塚本邦雄の美的宇宙

[液化ピアノから追伸の墨]

北嶋廣敏



塚本邦雄の美的宇宙 [液化ピアノから追伸の墨]



北嶋廣敏

而立書房

北嶋廣敏（きたじま ひろとし）

1948年，福岡県生れ。早稲田大学文学部卒。

著書：「塚本邦雄論—隠喩のミルワール」「憂愁の見者—統塚
本邦雄論」「浜口陽三の世界—愛と円環」「美術論集—美の
沐浴」「塚本邦雄論—短歌行為の彼方へ」「林檎学大全」
（全三巻）「聖アントニウスの誘惑」「パリの橋」「手紙の中
の人間模様」「塚本邦雄論集成」（編・共著）

訳書：クロード・オリエ「治安維持」，レオノール・フィニ
「夢先案内猫」

探検百首 ■ 塚本邦雄の美的宇宙 ——「液化ピアノ」から「追伸の墨」

1986年7月20日 第1刷発行

定 価 1800円

著 者 北嶋廣敏

発行者 宮永捷

発行所 有限会社而立書房

東京都千代田区神田神保町1丁目20番地
振替・東京9-174567／電話 03 (291) 5589

印 刷 科学図書印刷株式会社

製 本 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします 1095-0853-3359

© Hirotohi Kitajima, Printed in Tokyo, 1986

序

これは世にいう秀歌百撰などといった類いのものとはおのずから異なる。秀歌ひしめく作者の歌のなかから、さらに百首を撰ぶことはそもそも無理な話であって、それは当の作者にとってもおそらくできない相談であろう。ここにとりあげた歌は私が日頃愛唱（誦）している歌という以外にはなんら基準はなく、ましてやその質によって撰定したわけでもない。それに、ここに示した鑑賞にしたところで、それはあくまで「私の」それであり、そこに客観性を求めることはむろんできない。もとより鑑賞において客観性というものがありえるはずはなく、また望むべくもないだろう。だからというわけでもないが、ここで私は「私の鑑賞」に固執したいと思う。歌はしよせん私の舌、私の五官でしか味わうことはできないし、たとえそのことによってその歌の世界の一部分しかくみとれなかったとしても、それはそれで仕方がない。私はこれまで作者の歌を完璧に理解できたと思ったことは一度もなく、だいいち理解するなどというそんな傲慢なこととは思ったことすらない。ただ、理解はできなくとも、少なくとも味わうことはできたつもりである。

目 次

序

『水葬物語』

革命歌作詞家に凭りかかられてすこしづつ液化してゆくピアノ
のひらの傷いたみつゝ裏切りの季節にひらく十字科の花
しかもなほ雨、ひとらみな十字架をうつしづかなる釘音きけり
赤い旗のひるがへる野に根をおろし下から上へ咲くジギタリス
当方は二十五、銃器ブローカー、秘書求む。——桃色の踵の
ギョティースに花を飾りてかへりきぬ——断頭人の待つ深夜のキャフェに
榆の切株に腰かけ友情について議論をするコキユ同士
舞踏靴人目をさせてはく踊り子のつまさきにある過去のきず
迷路ゆく媚薬売りらも檻梲の果を舐めてまた睡りにかへり
てのひらの迷路の渦をさまよへるてんたう蟲の背の赤と黒

『裝飾楽句』

鞆に揺れをり今宵少年のなににめざめし重たきからだ
さわがしき愛恋のすゑ老優がつひに飼ひはじめし眼鏡猿
われの戦後の伴侶の一つ陰険に内部にしづくする洋傘も

イエスの代価銀二十枚われの齒の幾枚か缺けて冬に入るべし
 頸ふとき夫人の像を飾りをり この写真館もはやくつぶれむ
 孤兒院へあたらしき孤兒、暗紅の風船をさむき夕空に曳き
 喜劇映画観てゐるときもすぐ其処に冷たき光洩る非常口
 菓種商モナ・リザを商標として菓効かざればしぶとく榮ゆ
 道化師と道化師の妻 鉄漿色の向日葵の果をへだてて眠る
 イエスに肖たる郵便夫来て鮮紅の鞆の口を暗くひらけり
 青年が熱き町湯に石鹼の盛りあがりたる羅馬字耗らす

『日本人靈歌』

日本脱出したし 皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも
 はつなつのゆふべひたひを光らせて保険屋が遠き死を売りにくる
 復活祭まづわれら生きかへりたき薄明にこの香る菊苗
 毛深き犬がかたはらはに臥てこころ今ゆたけし
 出口なき酷暑の墓域、水浴びし墓石定型詩のごとく覺む
 ロミオ洋品店春服の青年像下半身無し * * * さらば青春
 冬苺積みたる貨車は遠ざかり <Oh! Barbara quelle connerie la guerre>
 春月赤き宵宵にして孤独なる下婢が塩をみだりに費ふ
 袋小路の肉屋に妻は肝臓と舌を約せり さむきジツド忌

『水銀伝説』

燻製卵はるけき火事の香にみちて母がわれ生みたること恕す

乳房その他に溺れてわれら存る夜をすなはち立ちてねむれり馬は

あざやかに夜の杜^{かきつばた}若マルキ・ド・サド選集は父にうばはれしかば

水^{ウォーター}球^{ボール}の青年栗色に潜れり 娶らざりし da Vinci

ルソーの「田舎の結婚式」の犬黒くうづくまりわれの犬、卵色

死せる母の髪より娼婦の髪長し 紅海今は潮干る頃

輝くランボーきたり、はじめて晚餐の若鶏のみだりがはしき肋骨^{あばら}

少女、処女となる テレヴィには北溟^{グレイケン}の海 賊わななきて死する閒

エレミア哀歌の哀の文字なし歩みつつ 狷^{はりねずみ}完膚なき針もてり

パリサイド・ホテル毛深き絨毯に足没す かくも父に渴き

『緑色研究』

アヴェ・マリア、人妻まりあ 八月の電柱人のにほひに灼けて

採油塔の脚しなやかにむらかれるバクーとぞ死後の蜜月の町

医師は安楽死を語れども逆光の自転車屋の宙吊りの自転車

出埃及記とや 群青の海さして乳母車うしろむきに走る

夫婦と犬つめたき葡萄かこみをり あやふくボルジア家に連なりつ

眠る家族の脚入りみだれ峽^{ノール}湾のぎざぎざの死への遠さと近さ

7 目 次

海苔焦げて痙攣^{ひきつ}るみどり マヤコフスキーを死に逐ひつめたるものは？

芍薬と半音階と麴麴の耳愛し銀婚の日の悪伴^{ワース・ベック}侶

ラ・マルセイエーズ心の国歌として燐寸^{マッチ}の横つ腹のかすりきず

合鏡^{あはせかがみ}の蒼の世界に鬚剃ればわれとワグナーの逢ひかず知れず

理髪店まひるとざして縛めし青年の皮剥げる火曜日

『感幻楽』

褐色の獵銃あをき拳銃とあひ触れて夜の聖・銃器店

あまたなる愛の一つをえらびつつ青年の髪^{かみ}の底なる白髪

木犀一把 霜一つかみ 肉厚き男らはまはだかを着よとぞ

死は一瞬のめまひに肖つつ夏はやも少女らが亜麻いろの腋の巢

馬を洗はば馬のたましひ沍ゆるまで人恋はば人あやむるところ

ほほゑみに肖てはるかなれ霜月の火事のなかなるピアノ一台

麦婚てふ言葉のあらば黒穂なすわれらが髪^{かみ}の神に背くかな

口離^かるまでの言葉を詩と思ふのみ 若者の目の星明り

錐・蠟・旱・雁・掏摸・檻・罔・森・櫛・二人・鎖・百合・塵

レスラーがグレコ・ロマンのほろにがき対位法 月、枇杷色に満つ

『星餐図』

韻文のきのふほろびて麦熟るる光にわれはさらさるるかな

憑かるる前に憑け絵のマリア青桃せいとうのかたき乳房をイエスに乞ふ
 ナツイズムの夏は昔の汗にほひたつ 花果ててのちこそ空木うつぎ
 男色はさはれ薄暮はくぼと黄昏くわんこんのけじめもの憂く枇杷熟るるなり

夜の屋上の架線夫に請ふわが咽喉のおくに燈ひともすごととき接吻
 「その夜寝台ねだいに二人の男あらむに」と聖書は記せり 黒き紅葉こうえふ
 罌粟ひしりみに疾風しつぷうしかも死ぬまで独身のシャーロック・ホームズを朋とし

『蒼鬱境』

壮年は昨日きぞ 洪水ののち知らぬ蝶わがころもて殺めたり

『青き菊の主題』

溼青れきせいは遅遅とかわきてゆふつかたきみねがはざれどイエスの父
 モーゼ語りける戒のほか愛されてまづ雄藥よりけがるる罌粟

ランボーの妹禱りわがいもうとは祈らずも 青黛せいだいの眸まみ

百合科病院、天南星科医師てんなんしやくいし、茄子科看護婦、六腑夜ひらくてふ

みどりごは老いて生れむ聖家族寺院に錫色の月照らば

鳩の卵の網の目の亀ひびわがマンディアルグ巻末まで万華鏡

『されど遊星』

はほゑみてこの遊星の終末を見む漸弱音せしんじやくの秋ほととぎす

春はゆふぐれ夕陽はなやぐ飯の世の月日ユリウス曆にそむきし

164 162

160 158 156 154 152 150

148

146 144 142 140 138 136

キリストとイエスの閑^{はださま}厳しきにあやまちてたそがれのひるがほ

無花果のいつにはじまる物語恋の動詞のさやぎやまずも

水夫^{かこ}は二十二歳二箇月荒るる過去あらば鷗の声ほの紅き

たとへば愛たとへば嗜虐しろがねの鎖曳きシェパードは歩む

『閑雅空間』

劉生のあはれみにくき美少女はひるの冰室^{ひむろ}の火事見つるし

イエスに扮したりけるイエス霜月の噴水が苦しみて水噴く

ローマ春の味爽^{よあけ}美貌の犬連れて夫人去りけるヴァチカンの方

ヴェネツィアは硝子器疊るゆふかげにわれを思へばわれ在らざりし

『天変の書』

齒痛やまざる秋夜の底にラファエロの粗描「美しき女園丁」

冬苺、否きずあさきたましひのかたち見えたりミケランジェロ忌

使途一切不明なれども一壘の酢をあがなへり妖精少女

秋風^{しゅうふう}に思ひ屈することあれど天^{あま}なるや若き麒麟^{きりん}の面

七月の恋は火よりもかるやかに心を過ぎつわがアベラール

『歌 人』

姉あはれなり緋ダリアのかたはらに「先に行く」伝言をのこして

夏至はこころの重心ゆらぐ「わたつみのいろこの宮」の切手舌の上^{うへ}

甲胃^{かつちう}の群はなやかに渡らふは何の乱^{らん} 酒肆^{しゆし}「ノア」の窓にて
 追伸の墨かすれたり半月^{はんづき}の留守に罌粟百株を枯らして

『透明文法』

原子爆弾官許製造工場主母堂推薦附避妊薬

六月の木苺宿の宿帳にジャンはジャンヌとルイはルイズと
 鉄の扉^とにユダ美しき聖餐の図を彫りぬにがき一生^{ひとよ}のために

『驟雨修辞学』

妻の愛あまねき朝食^{あした}卓の新聞に水死者の生ける貌

愛を知るなかれ少女よ凍りたる街路に織き鉄環を廻し

春の夜の夢の棧橋郵便夫わたりてわれにわが死を知らす

あとがき

索引

装訂・政田岑生

213 212

210 208 206

204 202 200

198 196

探検百首 ■ 塚本邦雄の美的宇宙

——「液化ピエノ」から「追伸の墨」

革命歌作詞家に凭りかかられてすこしづつ液 化してゆくピアノ

『水葬物語』

なぜピアノは漆黒色をしているのだろうか。なぜ黒鍵は黒でなくてはならないのだろうか。ものみな色彩豊かになっていくなかで、なおピアノは黒から自由になることができない。全身黒づくめのピアノ——喪服を着たピアノ。そして、しばしばピアノは死の名曲を奏でる。ベートーヴェン「ピアノソナタ第三十二番」、ショパン「葬送行進曲」、リスト「死の舞台」、ラヴェル「クープランの墓」……。そのピアノが革命歌をつくる作詞家によりかかられて溶けてゆく。すなわち液化してゆく。

湖の夜明け、ピアノに水死者のゆびほぐれおちならすレクイエム

『水葬物語』

ほほゑみに肖てはるかなれ霜月の火事のなかなるピアノ一台

『感幻楽』

よろこびならず夕べ坂ゆく荷車に喪家そうかのピアノさざめけるのみ

『星餐図』

死と分かちがたく結びついているピアノ。だが、ピアノ＝死ではない。むしろピアノは生の象徴であり、これがレクイエムを奏でなければならぬのは、その生が死を余儀なくされているからにはかならない。液化してゆくとは死んでゆくと同義であり、この液化という言葉のイメージからサルヴァドール・ダリの世界を連想することは決して誤りではないだろう。はたして作者がそれをどこまで意識していたかはわからないけれども、ダリの絵には柔らかないピアノ、鍵盤から水が流れたすピアノなど各種のピアノが登場し、作者自身の歌にもしばしばダリは顔をだしている。

ダリの「燃えるジラフ」金雀枝色えにしだいろにその背焦そがらげわれに処女与へらる

『水銀伝説』

ダリを父として大雪の魚市の箱に睡魔なまこのごとき海鼠なまこら

『水銀伝説』

水芭蕉ひらく姦雄列伝に DALI と花文字もて書き添ふる

『されど遊星』

てのひらの傷いたみつつ裏切りの季節にひら

く十字科の花

『水葬物語』

同じてのひらの傷でも、寺山修司がうたうと「生命線ひそかに変へむためにわが抽出しにある一本の釘」となる。彼はこの歌を引用しつつ、こう記している。「子供の頃、じぶんの生命線がみじかいと人に言われて、釘で傷つけて掌を血まみれにしたことがあった。しかし、ほんの少しばかりの釘で彫った肉の溝も、傷が癒えると共に消えてしまい、私の生命線は、やっぱり短いままであった」（『青蛾館』）。作者のてのひらの傷が痛むのは、別に彼が寺山以上にてのひらに深い傷をつけたためではない。作者の現実の手にはむしろ傷ひとつない。だからこそ、実際の傷にも増して痛むのである。なぜか？

それは作者の手がイエスの手となっているからである。てのひらの傷とはすなわちイエスが処刑の際にうけた傷のこと。それも自らの理由による傷であれば、それほど痛むこと